

谷川道雄先生をしのぶ会

二〇一三年十月六日(日)

京都ガーデンパレス

第一部 「谷川道雄先生を追悼する会」 十七時

第二部 「谷川道雄先生を和やかにしのぶ会」 十八時半



◆略年譜

一九二五年一二月二日、熊本県水俣市に生まれる。父は開業医。長兄は民俗学者の谷川健一、次兄は詩人・思想家の谷川雁、末弟は日本エディタースクール創設者の吉田公彦。谷川四兄弟と称されるこの個性の強い兄弟の中で育つたことが、ある心理的屈折とともに人間と社会に対する鋭い洞察力をもたらす。一九四三年三月熊本県立旧制熊本中学卒業、一九四五年三月大阪府立旧制浪速高校を卒業して、四月京都帝国大学文学部史学科入学。同年七月徴兵を受け福岡で入営し高射砲隊に属するも、八月一五日の終戦で大学に戻る。敗戦後の荒廃した日本社会の厳しい現実と、「戦争がまるでなかつたかのように、戦前かららの研究の成果を静かに教室で語る」大学の講義との間のあまりの乖離になじめないものを感じ、「生きた人間の歴史とは何か」を自問しながら鬱々とした学生時代を送る。以後、生涯を通じて、「生きた人間の歴史とは何か」という原理的問いと現実をいかに変革するか」という実践的問いの二つの問題意識がその研究の中に貫して保持される。

一九四八年九月、「府兵制とその基礎条件」で卒業論文を提出し、京都帝国大学文学部史学科卒業。翌一九四九年四月京都大学大学院入学（一九五四年六月退学）。その間、亀岡高校社会科講師、洛北高校教諭を勤める。亀岡高校時代、同じ高校で教師をしていた良子夫人と知り合い、

一九五〇年六月に結婚する。直後に朝鮮戦争が始まる。洛北高校では、京都府高教組の委員として一九五二年の破防法に反対し、その過程で自らハンストを行った。戦前の中国停滞論の反省から、特に戦後一九四九年一〇月の中華人民共和国誕生後、中国史を進歩発展の歴史として見るべく新たな唯物史観、階級闘争史観に基づく中国史研究が学界で浸透していく中、「私自身の研究もそういう状況に大きく影響されていました」。この唯物史観の影響の中で書かれたものに、唐代民衆の反乱をテーマにした「龐勛の乱について」（一九五五年）などいくつかの論文がある。

一九五二年一一月に名古屋大学文学部助手となる。一九五六六年ごろ、それまでの唯物史観をベースにした「自分の研究姿勢に疑問を感ずる」ようになり、論文を書かない苦渋と空白の二年間が生まれる。その後、これまでの唐代史研究から魏晋南北朝史研究へと研究領域を転換。北朝の史書を丹念に読み込むことを通して、被支配者たる民衆の中にある人間としての自由に注目し、支配者と民衆の対立による機械的な階級闘争史観ではなく、両者の自律的共存関係に注目した独自の「豪族共同体論」を立ち上げる。一九六〇年代末から七〇年代にかけて、この「豪族共同体論」に対して、唯物史観派より批判とバッシングが相

私たちが敬愛する谷川道雄先生が二〇一三年六月七日に逝去されました。享年八十七歳でした。その生涯を通して、人間と社会に対する深い思いをもとに「生きた歴史とは何か」という問い合わせを追求し、中国中世史の卓越したご研究を続けてこられた先生を失つたことは、私たちにとってたいへん悲しく残念なことです。

先生のご冥福をお祈りしつつ、研究者としても教育者としても偉大だった谷川先生のご生涯とご研究の一端を、ここにあらためてご紹介させていただきます。

次ぎ、「共同体」論争が起ころる。一九七二年、名古屋大学文学部助教授を経て名古屋大学文学部教授。一九七三年一一月「隋唐帝国形成史論」で文学博士（京都大学）。一九七八年一月京都大学文学部教授。一九八九年三月京都大学定年退官。同四月龍谷大学教授。この頃、日本における中国史研究を網羅した『日本学者研究中国史論著選訳』全十巻（北京・中華書局）の中国での出版に尽力し、日中の学術交流を飛躍的に前進させる。

一九九四年河合文化教育研究所（文教研）主任研究員。同期の主任研究员に、木村敏（精神医学）、廣松涉（哲学）、中川久定（フランス思想・文学）。一九九六年一〇月、河合文教研内に「内藤湖南研究会」を立ち上げる。東洋史学の原点としての内藤湖南を根底的に学び直すことを通して「もう一度私たち自身の学問を創出してゆく」ことを目指す。

◆主な著作リスト

【単行本】

- 『唐の太宗』（中国人物叢書II）人物往来社、一九六七年
『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七一年
『中国中世社会と共同体』国書刊行会、一九七六年
『世界帝国の形成 後漢・隋・唐』講談社現代新書、講談社、一九七七年
『中国中世の探求——歴史と人間』日本エディタースクール出版部、一九八七年
『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九九八年
『中国史とは私たちにとって何か——歴史との対話の記録』河合文化教育研究所、一〇〇三年
『戦後日本から現代中国へ——中国史研究は世界の未来を語り得るか』河合ブックレット、河合文化教育研究所、二〇〇六年
『隋唐世界帝国の形成』講談社学術文庫、講談社、二〇〇八年

【共編著】

- 『歴史と現代 一九五四年度歴史学研究会大会報告』共著、『歴史学研究』別冊、歴史学研究会編 岩波書店、一九五五年
『中国中世史研究——六朝隋唐の社会と文化』川勝義雄との共著、中国中世史研究会編、東海大学出版会、一九七〇年
『新書東洋史上・下』伊藤道治他共著、講談社現代新書、講談社、一九七七年一九八〇年
『中国民衆叛乱史I—IV』森正夫との共編、平凡社東洋文庫、一九七八年一九八三年
『交感する中世——日本と中国』網野善彦との共著、ユニテ、一九八八年、のちに洋泉社MC新書、二〇一〇年
『戦後日本の中国史論争』編著、河合文化教育研究所、一九九三年
『中国中世史研究 続編』京都大学学術出版会、一九九五年
『東アジア史を問い合わせ——「戦後五〇年」を超えて』共著、河合文化教育研究所、一九九六年

近年は、中国に出現した維權農民という、暴動ではなく法によって社会の矛盾を克服しようとする新たな農民層に着目し、その歴史的意味を考察。これは、「豪族共同体論」以来、中国の歴史を「官民二元構造」、農民の「自立と依存」というコンセプトでトータルに捉えてきた独自の研究の集大成をなすものであると同時に新たな研究のステップになる予定のものであった。二〇一二年七月、この維權農民運動の研究をもとにシンポジウム「現代中国農民運動の意義——前近代史からの考察」を主宰。二〇一三年四月、文教研主任研究員会議でこのシンポの学問的意義を発表。これが外に向けての最後の言葉となる。二〇一三年六月七日急逝。

京都大学名誉教授。北京大学・武漢大学・北京師範大学客座教授。

『社会・文化・思潮——東海の地平から』共著、愛知女子短期大学東海地域文化研究所研究叢書二、東海地域文化研究所編、風媒社、一九九七年

『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』編著、「中国史学の基本問題」シリーズ二卷、同編集委員会(谷川道雄他)編、汲古書院、一九九七年

『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』共編著、内藤湖南研究会編、河合文化教育研究所、二〇〇一年

『歴史の中を人間はどう生きてきたか——私たちの場所から中国中世を見る』共著、グループ SURE、二〇〇八年

【訳文】
『土地を奪われゆく農民たち——中国農村における官民の鬭い』 王国林著 谷川道雄監修 中田和宏・田村俊郎訳、河合文化教育研究所、二〇一〇年

【主な論文】
「北魏末の内乱と城民(上)」(『史林』第四一巻第三号、京都大学史学研究会、一九五八年)

「北魏官界における門閥主義と賢才主義」(名古屋大学文学部十周年記念論集)、一九五九年、のち『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九九八年に再録

「東洋史研究者における現実と学問」(『新しい歴史学のために』京都民科歴史部会、一九六一年、のち『中国中世社会と共同体』国書刊行会、一九七六年)

「拓跋国家の展開と貴族制の再編」(『岩波講座世界歴史』五、岩波書店、一九七〇年)

「中国社会の構造的特質と知識人の問題」(『思想』第五八二号、岩波書店、一九七二年)

「共同体」論争について——中国史研究における思想状況」(『年報』一、名古屋人文科学研究会、一九七四年、のち『中国中世の探求——歴史と人間』日本エディタースクール出版部、一九八七年)

「中国古代中世史と人間——宇都宮学の世界」(『名古屋大学東洋史研究報告』四号、名古屋大学東洋史研究会、一九七六年)

「貴族制と封建制——川勝義雄氏の遺業に寄せて」(川勝義雄・礪波護編『中国貴族制社会の研究』京都大学人文科学研究所、一九八七年)

「中国史研究の戦後と戦後後、そして現代世界」(『河合おんぱろす』、河合文化教育研究所、一九九二年)

「共同体と歴史認識——中国理解と中国外交史」(『情況』八・九月合併号、情況出版、一九九七年)

「内藤湖南と中国基層社会」(『史林』第八三巻第二号、京都大学史学研究会、二〇〇〇年)

「中国前近代社会の基本構造試論」(『名古屋大学東洋史研究報告』二六号、名古屋大学東洋史研究会、二〇〇二年)

「義の社会史——中国史に見る共生のモラル」(『道標』第七号、人間学研究会、二〇〇四年)

「内藤湖南の歴史方法——「文化の様式」と「民族的自覚」」(『研究論集』第五集、河合文化教育研究所、二〇〇八年)

「鳥坎事件と共同体の復讐」(『道標』第三七号、人間学研究会、二〇一二年)

「現代中国農民運動の特質」(『研究論集』第一〇集、河合文化教育研究所、二〇一二年)

※略年譜および著作リストに関しては、「しのぶ会」を準備するにあたってのわずかな期間でまとめたものです。

谷川先生のご著作など詳しい情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら「谷川道雄先生をしのぶ会」事務局までご教示いただければ幸いです。

河合文化教育研究所内 「谷川道雄先生をしのぶ会」事務局

〒464-8610

名古屋市千種区今池2-1-10
TEL 052-735-1706 (代)

FAX 052-735-4032

追悼

谷川道雄先生

谷川道雄先生は、一九九四年に河合文化教育研究所（河合塾の付属研究機関）の主任研究員に就任されました。

当研究所においては中国史のご研究のかたわら、東アジア史や「アジアの歴史と近代」をテーマにしたシンポジウム・研究会の主宰及び顧問・研究成果の発表や執筆などにも力を尽くしてこられました。

最近は特に現代の中国農民運動に強い関心をお持ちになつていらつしやいました。毎年春京都で、主任研究員・特別研究員の先生方が一堂に会し、一年間のご研究を、限られた持ち時間ではありますがお話ししてくださいざる会議があります。今年も4月15日に第二十二回主任研究員・特別研究員会議を開催いたしました。

ここに谷川先生の当日のご発表の録音を文字に起こしました。

耳が遠くなつても、お身体が弱くなつてもなお粘り強く、苦しくつらいこともまた覚悟の上で、強い精神力でご研究を続ける意欲を語つていらっしゃいます。

◆「アジアの歴史と近代」をテーマとした日中共同学術討論会の発表を収録
『研究論集』第1集～第10集

◆河合文化教育研究所から刊行した著作

『中国史とは私たちにとって何か—歴史との対話の記録』

『戦後日本から現代中国へ—中国史研究は世界の未来を語り得るか』

◆『戦後日本の中国史論争』

◆『東アジア史を聞いて直す』「戦後五〇年」を超えて

◆『内藤湖南の世界』「アジア再生の思想」

◆『土地を奪われゆく農民たち』「中国農村における官民の闘い」

◆『中国史研究の戦後と戦後、そして現代世界』

◆『主宰者・発表者・シンボリストとして関わられた

◆『シンポジウム』

◆『日中學術討論会』「日本学者研究中国史論著選訳出版慶祝

◆『學術討論会』

◆『戦後50年シンポジウム』「東アジア史を聞いて直す」「戦後50年」を超えて

◆『日・中・韓の大学入試統一試験を社会的・文化的に比較分析する』

◆『中・日・韓三国関係と東北アジアの平和的発展について』

◆『日中學術討論会』「魏晉南北朝隋唐時代の歴史的特質』

◆『日中共同學術討論会』「アジアの歴史と近代(1～9)」

◆『日中共同學術討論会』「アジアの歴史と近代(1～9)」

◆『現代中国農民運動の意義—前近代史からの考察』

◆『主宰・顧問をされた河合文化教育研究所の研究会』

◆『内藤湖南研究会』「中国農民研究会」

◆『顧問・世界史研究会』「中国史研究会」

◆『現代研究会』

◆河合文化教育研究所合同研究会での発表
『官民の二元構造と近世・近代―中国民衆の命運について』
「中国民衆はいまどこに立っているか―現代から歴史へ」
2000年5月

「現代中国農民運動の意義」についてと 新しい農民共同体創出の可能性



谷川道雄先生

てあります。

◎「現代中国農民運動の意義」について

なぜシンポジウムをやったか、といふ意図ですけれど、私は自分でそれを三つに総括します。

(一) 過去と現在の対話

私たち歴史家ですが、「過去」と「現在の対話」非常に有名なE.H.カーリーの言葉ですが、そういう対話をやっぱり、歴史家として、中国史家としてしなりやいけない。で、現実はどうかというと、今日の中国の現実から逃避して、個々の歴史事象に非常にかかずらわって、まあ、新しいことは関心は持つておつても見ない、棚上げする。そういう研究者が多いんですね。8割ぐらいはそうです。私はそれは本当の歴史家か？ そういう気持ちがありまして、こういう対話を試みてみたい。

過去と現在の対話と言つても、たとえば、中国は二千数百年専制体制でした。現在の中国共産党の率いる國家も専制体制でしょう。だから人はよくその専制体制をいわば踏襲していましたが、今日は特に(5)の昨年7月にやりましたシンポジウム「現代農民運動の意義—前近代史からの考察」についてお話ししたいと思います。それ

そういう伝統を引き継いでいるかもしれない。しかし、今の中国共产党の、現実に生きて政治をやっていることを考えなければですね、昔からそうだったということは、たとえば、谷川道雄はアホや、とあれは昔からアホやつたから、というのと同じでしょうね？ それでは私が浮かばれませんわね。（笑）

(二) 自立と依存

で、そんな考え方をやめようと。やつぱりつなぐものを考えなきや。つなぐものの内容、方法ですね。農民生活における「自立と依存」という関係。農民は自分の土地を耕作して、家族労働で自立した生活を送っています。けつしてこれは、国家の奴隸でもなければ、農奴でもありません。しかしながら、農民は自分で完全に自立はできない、何かに依存しなければ不可能です。國家権力がなければ、よそから遊牧民族が入つてきて、農民たちを略奪するというようなことを防ぐことはできない。農民個々の力ではできません。やはり國家権力というものが必要です。あるいは地域によつてはその地域の有力者が中心になつて、侵略や自然の災害、そついうものと闘つて、農民の自立を保障するということがなければなりません。

そこに、これは昨年もこの会で申しましたが、「自立と依存」というで

25分ですか？

（司会：はい）

レジュメを、お手もとに2枚ほど用意したんですが、ローマ数字の(1)～(5)が、まあいろいろやつた仕事なんですね。その中に

(1) 鳥坎事件と共同体の復讐

(2) 鳥坎村事件から連想すること二題

(3) 反日デモ考

(4) 湖南省衡陽県農民協会のこと

ここまでですね、九州熊本に人間学研究会、これは渡辺京二先生と

石牟礼道子さんらがお作りになった

サークル、そこから毎年、クオータリ

ーで雑誌を出しておられる。その『道

標』っていう雑誌に書かせていただいたものが、4番まで。

聞こえますか？ 私の声。

（会場：よく聞こえます。大丈夫です）

私の方は聞こえないんです。（笑）まあ、ええわ。言うだけのことは申し上げます。

その4番まで、ある程度気持ちを込めて書いてますので、お読みいた

だければありがたいと思っておりま

すが、今日は特に(5)の昨年7月にや

りましたシンポジウム「現代農民運動の意義—前近代史からの考察」に

的考え方だろう、俗論だと思つて

います。

そうじゃなくて、多少はそりや

の記録は『研究論集第10集』に載せ

すね、論理的にいえば矛盾した構造のものとで長い間、二千数百年も農民たちは生きてきた。

私は考へるんです。
まあ、こういうわけで、それをいつ

まあ、こういうわけで、それをいつ
しょにやっている、農民研究会、内藤
湖南研究会の連中、これはそれそれ
の時代の研究者であります、その
専門の立場を通して、その問題を論
じてもらいました。

じやあ現在ではどうか。依存と言いました。農民たちが依存するのは、国家権力であり、あるいは民間の農民以外の有力者。ですから、これは農民にとっては他者です。他者に依存することによって自立する。こういう社会的な矛盾した構造の中に生きている。したがってそこに、収奪といふのが出てくるわけですね。

(三) 他者依存から自己依存

現代の農民の動きはどうかといふと、国家権力が、つまり官僚が農民をめちゃめちゃ収奪していますよ。農民は自立できない。土地をもつていてくんですから。土地を収奪するんですよ。自立も何もないので。

現代は、過去と違つて、新しい運動の段階にある、というふうに私は考へてゐる。これがまあ、3番目のですね、「他者依存から自己依存へ」。そこには農民自身の、農民の自主的な連帯、彼ら自身が国家の大将だし、新しい農村共同体を作つて行く、新しい自分たちの世界を作つていくという理想、これが何らかのかたちで提示されるべきじやないか。

○周辺の時代との関係を見ること
この三つの要件というものをです
ね、現代の農民運動は含んでいると

◎新しい農民共同体創出の可能性

○中国の大きな歴史の流れの中で
で、昨年まではそれが主な仕事で
ありました。……まだ時間、何分あり
ますか？



二、主任研究員と
歓談されている当田の谷川先生

新しい農村社会、けつして工業化社会ではありません。そういう社会を作っていくんだというのですね、そういう方向へ歴史は歩んできたということを実証したと……まあ本当に完全に実証し得ているかは問題ですが……おそらく、長期的にはこういう流れも、中国の歴史の中を流れていくであろうと。ちょうど黄河が源から北へ流れて、それから東へ流れてそれから南の方へだーっと流れる。それから、北東方面へ流れて、そして大海に注いでいくよ。いろんな大きな山があり、いろんな障害物があるにもかかわらず、川の水っていうのは必ず一定の法則、つまり低いところへ向かってですね流れていくと、いですね、中国という地形そのものに、やっぱり大きな歴史がそこへ向かうのであろう、と。そう思つて、おるわけですが……。

は今の権力者にとつては虎よりも怖いと、そういう表現をしていますが、おそらくそうだろう。どうしても自分たちが干渉する。干渉する中から、利益を吸い上げなければ自分たちの権力は成り立たない、ということになります。そういう外からの、権力の圧迫。

が一至る所に。また、政府はそれを利用して、土地が荒れ果てているわけですから、そいつを取り上げて、開発いたします。もちろん、農業です。こういうかたちで彼らに一種の都市化の利益を与える、ということになつて、非常に何ていいますか、農村をいわば壊滅させていくという。

からいえば、世界がどうなつていくのかという問題に直接つながるであろうと。

後記

これが生前、谷川先生が語られた最後のお話になるかと存じます。

先生はとても元気で意欲的に、時に冗談をも交えながらお話をされていました。

そのお姿から、わずか2か月居らず後に、まさかお亡くなりになってしまわれると、誰が予測したでしょうか。

「中国農民の自己に目覚めてゆく姿は、私のような老齢、身障の者にも勇気を与えてくれる。そのパワーに触発される」とおっしゃっていました。

困難な状況の中で自立して行こうとする新しい中国農民の出現に夢を託したご研究の道半ばにして艱れられたのは、さぞかし悔い深いことでしょう。

ご無念だったことと存じます。

私の、まあ自分の個人のことですが、研究年齢というのも限られております。これはもう、人間の一杯というのではなくて、あるわけですから。そういう中でいかにこれをやつしていくか。まあ、見とつてくださいとは、よう言いませんが、まあ、少しでもですね、勉強して、来年の、いや今年ですけど、『研究論集』には、何かそういうところをにじませた論文をひとつ書いてみようかと、そう思つてます。

かそういうところをじませた論文をひとつ書いてみようかと、そう思つてます。
もう10分とうに過ぎましたか？
(司会：ちょうどです。)
はい。じゃあ、これで終わります。
(司会：ありがとうございました。)